



TITLE:

通信欄

AUTHOR(S):

---

CITATION:

通信欄. 天界 1929, 10(105): 70-73

ISSUE DATE:

1929-11-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161487>

RIGHT:

## 通 信 欄

### 荒木俊馬氏より

**第七信** 三月十九日ナポリにてナポレターノ、アラキ

ナポリに着きてすでに二週餘。イタリヤ語も出鱈目のまゝ通する様に相成候。カポデイモンテの天文臺も二度訪ね申候。ベムポラード臺長は仲々親切に御座候。南歐ナポリは今正に春たけなはに御座候。檸檬（リモネ）柑子は黄金に實り。笠松の緑濃く、野には桃の花さき亂れ候。空は碧、清は紺青、一日ボムベいの廢墟を訪ねて、心ゆくまでに昔さかえしボンベいを偲び候。今はたゞ残る石と壁との間にも草原あり、紫濃き堇花咲き、又イリスの花咲き亂れ居り候。天文の人々一同によろしく。

**第八信** 三月二十九日午後美しきナポリを去つて永遠の都羅馬への三等車中にあり。カムパンヤの野邊は今若芽ふく頃、野には花咲き亂れたり。顧みすれば、ベルラ、ナポリは雲煙の彼方に遠ざかり行くに三十五日のナポレターノは無量の愛着をナポリとそのデイントルノに残す。ベルラ、ナポリよ。ボメロの丘よ、カポデイモンテの陵よ。サントルチャの日盛りよ。さらば、ヴィヤ、ローマよ。さらば、ボジリポのカポよ、ポツツオリよ。カマルドリの僧院よ。永遠に火を吐く、ヴェスビオの山よ、ソルレントよ、ポチペよ、アマルクイよ。日夜望みて遂にたづねざりし夢の如きカプリの島よ。さらばナポリリーノよ、ナポレターナよ、ナポリの民謡よ——シベリヤーナの歌よ、アーバーナの歌よ。さらばさらば、ベルラ、ナポリよ。

**第九信** 定めなき放浪の旅です。永遠の都羅馬に出でて既に一句餘、新月は再び鎌の如き三日月となつて古へに榮えた羅馬の榮華の跡を照しはじめました。サンタンゼロの古城の上に、コロツセオの形骸の上に、そして常に濁つたテヴェレの河の上に。スイスからの便りに「来る日も雪、来る日も雪。昨今は山も野も野々も眞白になりました」羅馬も春は云へ薄ら寒い。テヴェレの河畔の街路樹が新芽をふきかけたまゝふるえてゐます。

こんな時にはあの暖かなナポリと其郊外が戀しい。リモネやアランチコの黄金、野に咲き亂れた草花を。そしてヴェスビオの煙もスカプリの島の姿も。今頃は天文臺も寂寥たるものでせう。日食遠征隊はいつかへりますか。新入生はありましたか。コスモポリターノにも時々故國の學窓に無限の戀しさを感じます。又幾山河を越えてゼルマニヤに行く日はまだきまりません。艶なりや五月。五月には伯林の月を見るつもりでゐますが、天文臺の方々によろしく。切角御自愛と御研究を祈ります。四月十一日於羅馬  
コスモポリターノアラキ

#### 第十一信 竹田新一郎君 !!

其後如何ですか。日本にも春の訪れがあつたでせう。今頃は櫻の花が夢のやうに咲き揃つて居るでせう。圓山公園の夜櫻はいいですね、花見小路にボンボンがほんのりと明るく篝火をたいて、都踊の鼓の音がボンボンと響いて来るあたりは羅馬のそこを探しても見つかりません。拿破里は永遠の春の様に暖かく空は澄み海は紺青、其郊外には野花が咲き亂れ檸檬アランチョは枝もたわわに黄金の色を光らせてゐました。羅馬は少々寒かつたですが、近頃やつと春の訪れが來ました。テヴェン河畔のプラターナにやつと黄色な芽を吹き出しました。此の前の日曜日に自動車を驅つてアルバノからネミの湖畔に蕨取をしました。日本ならば温室でなければ見られない野花が亂れ咲き出でゝ居ました。此の國では食ふ事を知らない蕨はおのがじじ、一面の蕨の原でした。歸りにアルバノの美酒——アルバノは羅馬の「灘」です——アルバノの葡萄酒をのみすぎて、歐羅巴に來て如めてさうして歸つたか知らないほど酔いました。それでも感心に翌朝起きた時にチャント洋服をかけてキチンとズボンをたゝんで椅子の上にのせて置いたのを發見した時には自分ながらすつかり感心しましたよ。伊太利亞語でも一寸位クダがまけます。

一週間ばかり前に松本先生の紹介状と先生からの贈物を携へてあの有名な Levi-Civita 先生を訪問しました。非常によろこんで親切に歓迎してくれました。Napoli で少し讀みかけた先生の著書 *Fondamenti di Meccanico Relativistico* をもつて行つて署名してもらひました。そして先生の最近の

ペーパーを五つ六つもらつて來ました。またまた天體力學の話から東京の萩原雄祐氏の話が出ました。私から言ひ出したのではなく先生が言ひ出したのです。大變うれしく思ひました。日本を出る時に松本先生が「チツチャイ人ですよ。愉快的、おもしろい。吉田君によう似る」言ふ話でした。なるほぎ吉田先生にそつくりですね。たゞ頭の毛は大分白くなつてゐる。度の強い眼鏡をかけたアルレグロなオモシロイ人でした。「羅馬の天文ではアルメリーニ教授が居ます。君が會いたい時にはいつでも電話をかけてあげませう」この事でした。又ニシベンを訪ねるつもりです。松本先生には「僕が訪問した時にはヒゲは綺麗にそつてゐられましたよ」を傳へて下さい。此のレビ、デビタ先生は羅馬大學の工科でも、メツカニカ、ラチオナシを講義してゐられるそうですが、とても試験のこわい先生だそうです。僕が少し伊太利亞語の會話をならつた男が工科の學生ですが、「若し訪問なさるなら一緒につれていつて下さい」言ふ事でその男をつれて行きましたよ。こちらでは、試験は口答試験だそうで、特別に顔をおほえられておく大變都合がよいそうです。羅馬まで來て大學生の試験の手づだいさは恐れ入つた事ですな。

ナポリ、ローマで大分停電し過ぎました。この風でイイレンツエ、ベネチアで又々停電しては何時目的地につく事やらわかりません。だから一週間以内に伯林直行で目的地に向ふ心算です。大分學問が戀しくなりました。此の手紙がつく頃には私はすでに伯林の住民です。天文臺の諸君が大いに手紙を下さる事をお願いします。京都の便りもききたい。宛名は

T. Araki, bei der Japanischen Botschaft

Ahorn Strasse 1, Berlin, W. 62, Deutschland.

昭和四年四月十六日夜在羅馬城

荒 木 俊 馬

**第十二信** 古き羅馬に嘯ぶく事茲に一ヶ月。茲も又駘蕩たる春となりました。結局羅馬に滞在して何を見たか何も見ませんでした。ただ羅馬の春を心ゆくままに吸い込んだだけです。お前はローマに一ヶ月も居てごを見たかご問ふ人があるならば、私は次のやうに答へませう「僕は毎日ピンチョの丘の上のベンチに腰かけて通りすぎて行く人を見て暮したよ。男も

通れば女も通る、老人も通れば子供も通る。毛色眼色がちがふだけで日本も同じだよ。又僕はテベレの河岸のプラタナの新緑の下からウテヴェレの濁水をながめて暮したよ。又ボルゲーゼ公園の青草の上にひつくりかへつて青天井をながめてくらししたよ。ローマの空も京都の空も僕には同じ様に感ずるね。

私は明朝伯林に向います。まつすぐに、丁度小包と同じやうにね。ローマも今日でおしまい。日本の旅行者が一目で見る場所だけでも見ませんでした。去るこなるこローマが名残惜しい。では御機嫌よう。

四月二十九日      ローマにて

### 同好會神戸支部より

西須磨關守畔 改 發 香 塙

九月中は雨と雲にたたられて、星に親しむ夜は誠に少なかった。晝も同様の理由で黒點實測も不能の日が實に意外に多数である事に驚きました。

星野の寫眞を撮る事に可成苦心をしてるますが、肝甚の空模様が兎角めぐまれないのです。たまたま星は見えて居ても、雲があつたり、氣流が悪かつたりして、撮影に適した夜の少ない事を遺憾に思ひ且つ悲觀いたします。神戸に云ふ土地が此様に天文觀測に不適當の土地ではなかつた筈だが……。やつこ近頃になつて星野寫眞を撮りました、云ふて、お目にかけ得る程度に仕上げる事が出来る様になりました。近々持参して御批正を仰ぎ度く存してゐます。私以外にも星の寫眞撮影を試みたいと申込むでゐる人があります。具體化すれば、研究上好都合の事と私に樂みにしております。

九月七日(第一土曜) 例會の夜は全くの曇天で一星も見えず、雨さへ何時降り来るかも知れずと云ふ空模様で、會するもの僅に五名。中村氏も、同氏の令兄の御不幸があつて忌中の事でもあり、曇天でもあり旁々御出席がなかつたので大變淋しい會合でありました。

九月中來邸觀望者二十一名、星野寫眞撮影七枚。

十月十二日(第二土曜) 例會。會する者三十二名。中村氏出席。月面の地理に付て、一時間餘に涉つて甚だ詳細なる講話あり。終つて各自天文談に時の移るを識らず。實地觀望としては、美しい土星、立派な月面、星團、星雲、重星と夫れ夫れ觀望、此處にも興は盡きず。いこも楽しく。いこも有益な會合でありました。